

ベアトゥスの黙示録註解書写本について

中世初期のイベリア半島北部アストゥリアス地方のリエバナにある修道院の修道士、ベアトゥス(ベアトBeato ? -798)が776年に「ヨハネの黙示録註解書」を編纂しました。原本は既に存在していませんが、非常に人気を博し、10世紀から12世紀にかけて多くの写本がイベリア半島はもとよりフランスやイタリアなどで制作されました。ほとんどの写本には、彩色された挿絵が多数描かれており、その鮮やかな色使いと想像力豊かなインパクトの強い挿絵が後世にながく影響を与えてきました。

これまでに発見されたベアトゥス写本のうち、挿絵入りのものは29 写本あり、そのうち完本の写本は22写本、断簡の写本が7写本あります。

本ライブラリーには完本22写本のうち20写本のファクシミリ版があります。ファクシミリ版の中には羊皮紙の厚みやシワ・汚れ・破れ・落書きなどをそのまま再現した精巧なものもあります。

今月の展示写本

- (1) ベアトゥス黙示録写本 (①②③④⑤)
- (2) その他写本(⑥⑦)

①【ベアトゥス黙示録註解書：マドリッド写本】

10世紀前半に制作された最初期のベアトゥス写本。挿絵が切り取られている箇所が多く、当初60点以上あったと考えられる挿絵が29点の絵図しか残っていない。

②【ベアトゥス黙示録註解書：サンジヤン写本】

途中まで10世紀後半に書かれ、その後200年近く中断された後12世紀第1四半期に制作が再開された写本。

そのために49点の挿絵がありますが、前半はモサラベ様式の画風で、後半はロマネスク様式となり、挿絵の画風が大きく変わっています。

レコンキスタの進展の影響で、モサラベ様式が薄れたのだと思います。

③【ベアトゥス黙示録註解書：ファクトウス写本】

13世紀に制作されたラス・ウエルガス写本を除くと、修道院ではなく王室の依頼で制作された唯一のベアトゥス写本です。

大きさは他の写本と比較しそれほど大きくはありませんが、全312葉と一番大部な写本になっています。また、金・銀・紫がふんだんに使用され、豪華な挿絵が98点描かれています。

④【ベアトゥス黙示録註解書：ジローナ写本】

写本の最後の署名から、976年7月6日におそらくタバラの修道院で完成しました。挿画はエメテリウス(タバラ写本も制作)とエンが行いました。エンは女性名で修道女と考えられます。このことから女性も写本の制作に参加していたことがわかります。(当時の修道院は男女が厳密に分けられていなかった)

挿絵は、イスラムの影響を受けたモサラベ風の建築物や服装などが多くみられる。幾何学的な形状、豊かな色、装飾された敷地、様式化された人物といった形に、イスラム美術と装飾的伝統が混ざって表現されている。

⑤【ベアトゥス黙示録註解書：トリノ写本】

975年に製作されたベアトゥス写本ジローナ本を、12世紀のカタルーニャで写したものとみられる。ただし挿絵は12世紀風にアレンジされている。

⑥【ランベス黙示録写本】

13世紀半ばに多く作られた英仏黙示録(アングロ・ノルマン黙示録)の一冊。

挿絵とテキストが分離して描かれている第2系統に属する。同系統の黙示録に、「メッス黙示録」「タナー黙示録」「グレンキア黙示録」などがある。

⑦【パリ黙示録写本】

13世紀に突如流行となった英仏黙示録の初期の写本。系統としては第1系統に属する。

本写本は、黙示録の前後に挿入されたヨハネの生涯を描いた部分は、2段構成の全頁大挿絵(いわゆる「ピクチャー・ブック」形式)が配され、黙示録本文は半頁大の挿絵を上部に配して、下部にダブル・コラムでテキストを配している。